

人たちと作品を協働する感覚を共有できたことが強調されている。このように、今回のプログラムは、まちへの愛着をもたらし、継続的に地域に関わる「よそ者」としての関係人口的な立ち位置への変化を生み出す機会になり得ることを示唆している。

一方、スコア3の「多少は沸いた」を選択した理由としては、「下田の人と深く関わることがあったため、愛着は沸いた。しかし、やはりまだ『そうゆう場所がある』という感覚に近い」という記述が象徴的である。他にも「ここに来たらリフレッシュできると感じた」が「海鮮が食べれないことや、虫が多くいたことなど自分にとってマイナスな面をいくつか感じた」、「撮らなきゃという意識が強くありゆっくりのんびり見るができなかった」という理由があげられていた。

スコア3を示した理由からは、下田のまちに関しても観光客としての関わり—交流人口的な立ち位置という域にとどまるものであった様子が見えてくる。

この点に関して、タイトな実習スケジュールが影響した点が考えられる。たとえば、実習後のアンケートでは、「夜遅くまで作業しても平気な人にはおすすめでが、普段10時くらいとかに早めに寝ている人には気合いと根性で乗り切るしかなく大変だと感じた」、「コンセプト決めから撮影、編集までを2泊3日で仕上げるのは厳しい（中略）特に夜中に編集作業するのは身体的精神的にも厳しいため、夜に弱い人は大変。しかし、追い込まれて作品を仕上げるのもいい経験であるのと、自分がこの仕事に向いているのかを判断できる」という記述があった。

これは、じっくりと時間をかけて作品づくりに臨みたい学生もいることも想定して、プロジェクトにゆとりをもたせる配慮が必要であることを示唆している。

(2) 学生たちの成長実感

作品提出後にとったアンケート（7件法）からは、今回の教育プログラムを通して、学生たちは平均的に大きな学びや成長の実感を抱いていたことがわかった。とりわけ、筆者が分類した学修ス

キルや資質に照らすと、マーケティング意識、編集スキル、撮影スキル、企画・構成力という点がプロジェクト開始前と比較して伸びたという実感を抱く者が多い（図-6）。

今回のPBLを経験することによって、どのくらいの学びや成長の実感がありますか？ まったくない：1 ← とともある：7



図-6 学生たちの成長実感のアンケート結果 (N=16)

多くの学生がマーケティング意識や企画・構成力を選択した理由として、本プログラムのゴール設定の影響があると考えられる。つまり、フィールドワークを通して自らが感じたものを重要視して作品制作をおこなったため、学生たちが何を目的にそれぞれに作品づくりをするのかという点に向き合わざるを得なかったのである。それが、上述した成長実感につながったと考えられる。

実際に学生たちが成長した「力」を選択した理由には、次のような記述がみられた。「映像を作るうえでの視聴者へどのように伝えるかという考え方」、「企画を考え、人に見せるという考えを張り巡らせることで学びへと繋がった」、「自分たちが作った映像作品を誰にみてもらいたいかという、ターゲットを明確に意識した」、「誰に届けたいかなど詳細を良く考えて作るようになった」など。

この点に関して、実習最終日の講評会において実際に下田の関係者の方々に作品の一部を視聴して生でコメントを貰う機会があったことは、ターゲットを意識することのリアリティを与えることになったと思われる（図-7）。



図-7 講評会の様子

また、多くの学生が編集や撮影スキルを選択した理由は、今回の作品づくりに不可欠な作業として実践をただけでなく、SHK 職員による作品づくりに対する的確なアドバイスやフィードバックが大きな意味を持ったと言える。例えば、学生たちは、以下のように記述をしている。

「自分たちが学んでいることを仕事にされている方から直接アドバイスをしていただける環境で学べたことを感謝している。SHK さんからしたら初歩的な事でも質問したら全て詳しく丁寧に説明してくださったため自分の成長に繋がった」

「私はインタビューをする際少し早口になってしまっていたが、アナウンサーはゆっくりとわかりやすい口調で質問していて、される側としては聞きやすく、考える時間もあってすごくやりやすいと感じた。また、カメラマンの方が『こう撮るといいよ』『そっちだと逆光になっちゃう』『風は止めた方がいい』など必要に応じて指導して下さい、とても勉強になった」

「撮影準備やインタビューなどの一連の流れがスムーズで驚いた。2人で回していたのに私たちの邪魔にならないようご配慮もしてくださって、今後取材や撮影をしていく身としてとても勉強になった。撮る側になりたいと思ってこの道を選んだのに、いざ撮られる側になってみると緊張して自分でも何を言っているのか分からなくなってしまったのが正直な感想である。普段は感じる事のない、カメラを向けられる側の経験ができて新鮮だった」

「交流会にて、SHK の方々とお話しさせていただいた際、私たちは何を伝えたいのか等が不明瞭だということや、素材の撮り方がわからないということをご相談させていただきました。撮り方、編集方法はカメラマン、編集者の好みもあるし正解はないけど、ただ風景を撮るのではなく『これを撮りたい』を明確にして撮ることを意識すると、画角の入れ方など自然とわかるようになるというアドバイスをいただきました。その後はご教示いただいたことを意識して撮影に取り組みました。聞く前と聞いた後では撮影に対するプラスαができていい気づきになりました」

このように、今回のプログラムにおける SHK との連携は、放送映像についての専門的な学びを深めようとする学生たちにとって有効に機能し、次項で述べるように、学生たちのモチベーションを高めるポジティブな影響を与えたといえる。

(3) 学生のモチベーションの向上

作品完成直後に、自身の作品について思い通りの表現ができたのか (5 件法)、その理由について言語化してもらった (図-8)。

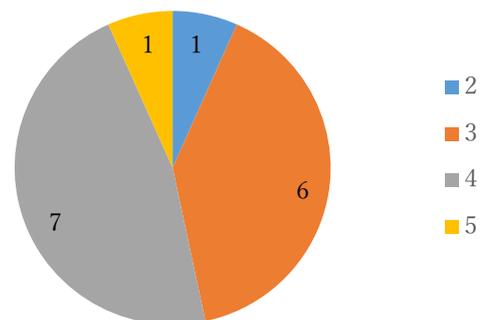


図-8 思い通りの表現ができたか
(N=16, n=14)

選択した理由についての記述を見ると、多くの学生は、作品として完成できたことに達成感を感じていることが共通していた。だが、最終的な仕上がりに非常に満足している学生は1人のみであり、他は何らかの納得のいかなさを感じていた。学生たちの記述を見ると、まず、作品のコンセプトそのものの独創性や独自性を出せなかったとい

う点での不満足さが共通する傾向として見られた。

たとえば、「広告業者に依頼して制作してもらった映像とどのような点で差をつけることができたか」と考えたときに、あまりできていないのではないかと思った（中略）誰もが作ることでできる作品になっているのもあまり満足はしていない、「コンセプトをやんわりとした感じで始まってしまったため、交流会や先生方からのフィードバックを受けて方向性をコロコロ変えてしまった点があったため、あまり自分たちらしさが出せなかった」、「最初考えていたレトロをテーマとする内容とは別のものになってしまったので思い描いたものではない」といった記述がみられた。

次に共通する傾向として、作品のコンセプトを表現するための準備や技法が足りなかったという反省である。たとえば、「頭の中で想像してるものを作ろうとしても、それを作るのに必要な動画が足りていなかったり、イラストでの表現も技術が足りずいまいち求めていたものにはなっていなかったり、実際に作ってみると『あれこんな感じになるのか』というのが多々あった」、「動画素材など撮り忘れていた部分が少しあり、思い通りのインサートを差し込むことができなかつたとおもう」といった記述がみられた。

このように今回のプロジェクト学習を通して、学生たちは、限られた時間のなかで仲間とともに一つの作品を完成させることができた、という点での達成感は強いものの、それで十分な満足をしたものは少なかった。学生たちの多くは、自身の理想と現実のギャップを認識した。そして、ギャップを埋めるべく、自らの課題を見いだした。それは、次への挑戦や目標設定を促すことになり、モチベーションを向上させる意義があったといえる。例えば、「もう一度、『下田まち遺産』をコンテンツとする作品づくりをおこなうとしたら、どのような作品を制作してみたいですか？」という問いに対する学生たちの回答は、以下に紹介するように、意欲的かつ具体的に踏み込んだ記述が多くみられた（似た内容の記述は省略）。

「今度はまち遺産に関わる人のドキュメンタリーのようなものを制作してみたいと感じた」

「下田まち遺産の建物の全体をドローンで一周してから、建物内に入っていきという動画を繋ぎ合わせることで、ドローンの可能性を広がる作品を制作してみたい」

『下田まち遺産』の周知CMを制作してみたいです。30秒程度で、『下田まち遺産』の制度について何があるのかなどを伝えるものです」

「〇〇さんのグループのような雰囲気動画を作りたいです。スピーディーでな縦向き動画を作ることでVlogのようになりTikTokやインスタにもあげやすい形になると思うので、それで若者へ向けて下田のまち遺産の魅力を発信する動画を作りたいです」

「下田まち遺産を海外の人向けに紹介する動画を制作したい。なまこ壁や形が変わった郵便ポストは海外ウケがありそうだと考えたから。また、まち遺産ではないが黒船祭の様子を作品にしてみたい。黒船祭は下田の日常とは全く違う雰囲気で作っているのを知り、人が賑わっている下田を撮影したい」

「人をメインに出演させてセリフを足すことで、ドラマのようなストーリー性のある作品を制作したい」

「映像ではなく写真として制作してみたい。確かに今回の映像制作でも写真はいくつか撮ったがどうしても動画中心の撮影方法だったため写真へのこだわりはそこまで出せなかった。そのため、写真という目からでしか感じ取れない媒体で制作したい」

「夜の下田が一番印象に残っているため、夜の下田を使ったイベントを企画して撮影してみたいと思いました。また、今回下田に住んである方に向けた作品を製作したため、ドキュメンタリーにして地元の方にインタビューした作品や、自然が多かったため景観をいろいろな角度から撮影したPR動画を作成してみたいです」

以上のように、学生たちは作品完成に達成感を
得たものの、思い描いていたものを独自に表現す
るという面で課題を感じ、満足度は限定的だった。
だが、自身の理想の表現と現実のギャップを認識
できたことは、ドキュメンタリーやPR 動画など多
様な表現方法への具体的な挑戦意欲を高めること
につながった。

(4) 下田側の受け止め方

学生たちの作品に対するフィードバックは、SHK
職員をはじめ関係者の人たちから制作途中におい
ても実施していたが、完成作品に対してもコメン
トをいただいた。以下に実際の学生グループの作
品の一部と学生が作成した紹介文、それに対する
下田の関係者の方のコメントを掲載する。

タイトル：「週末旅行で下田まで」

静岡県下田市のことを知っていますか？日本最
初の開港場として歴史遺産が多く残る「開国のま
ち」です。そんな下田市ではまち遺産として登録
された歴史や自然、文化を楽しむこともできます
が、グルメも負けていないんです！まち遺産×グ
ルメの魅力をたっぷり詰め込みました。週末に満
足な旅行はいかがですか？（図-9）

動画リンク：<https://youtu.be/PH5Z0gSCuyo>



図-9 動画 URL

コメント 1

「スピード感があって見やすいと感じます。動画
時間が短くテンポがいいので、ついつい何度も再
生してしまう。グルメにウエイトを置いた動画で
あれば、1 品あたりのカット数を増やして、もう
少し長く映像に料理が映し出されるようにしても、
良いかもしれません。『何を食べたか』程度には理
解出来ますが、『美味しそう』などの感想は持てま

せんでした。料理を撮影する時だけ照明を使用し
て、露骨に他のカットよりも綺麗に仕上げるなど
でも、不思議と料理がよりおいしそうに見えたり
します」

コメント 2

「旅先でのグルメ情報は誰もが調べるものでこの
動画を見て下田のグルメ食べに行きたいと思う内
容でした。お店の方が優しかった、なまこ壁の建
物に入れる等の情報があり行ってみたいになりまし
た。BGM のテンポに合わせてカットしていくのも
好きです。私も伺った事があるのですが、〇〇さ
んと〇〇さんの魅力や情報がもう少し出せた気も
します」（〇〇は個人店舗名のため伏せ字）

コメント 3

「下田へ明日行こうかという会話が、視聴者に下
田は近いんだという事を印象づけることが出来て
良い。女子大学生目線での映像でターゲットが絞
られていたことが良いと思う。最初の映像がクリ
アではないのは意図があつてのことかどうか」

タイトル：「ジェイクとエヴァンスの下田訪問」

ドローンによるさまざまな視点からの街並みの
撮影、個性豊かなキャラクター達による下田の町
の紹介、下田に行った感想を自分たちの感情を取
り込むことによって、新鮮な映像作品になってい
ます。また、ドローンの身に起きた悲劇から、キ
ャクター達がどのように行動して、ラストを迎
えるのかも見所です（図-10）

動画リンク <https://youtu.be/9LtH8a0y4Ko>



図-10 動画 URL

コメント1

「アニメーションと静止画で進んでいく構成が凄く好きです。二人のうち一体がロボというのも最高です。私の好みになってしまいますが、アニメーションに動きがあるので背景は思い切って全て静止画でも面白いかも。ジェイクの質問に対して完璧に答えるエヴァンス、その内容に関する静止画をバックに張る（引きや寄り、別アングル等混ぜて何枚も）のような感じ。住職喋りカットも住職が喋ってた内容をエヴァンスが語る方が個人的には好きです」

コメント2

「雑多なジャンルを組み合わせた、戯曲ショートムービーの印象を受けました。一貫性が無く、“ここは無くてはよくない！？”というパートも多いように感じますが、それも含めて作品の“良さ”を感じました。全体的には楽しく笑える動画に仕立てたいのかな？と思い、了仙寺インタビューパートがシリアスなドキュメント風な印象を持ってしまったので、ハート-1です。せっかくキャラクターが登場しているので、○○○のように、キャラクターに質問させてみたり、相槌や反応をさせたりして、統一感を持たせてみてはいかがでしょうか？」（伏せ字の部分は番組名）

コメント3

「ナビゲーターがいてなかなか面白い。もう少しテンポがあっても良かったと思う。了仙寺の住職のインタビューは良かった。最後金目鯛を食べたのかな」

なお、SHKの自主番組「下田まち遺産の使い方～大正大学表現学部下田プロジェクト～」のなかに視聴者のコメントをもらえるQRコードを埋め込んだものの、これを通した意見は見られなかった。今回のプロジェクトの関係者ではない下田の人々の声を拾うためには、別途、仕掛けが必要であることが見えてきた。

4. 課題と今後の展望

今回の教育プログラムでは、静岡県下田市の「下田まち遺産」を題材に、大学生が地域資源を活用したデジタル映像作品を制作することで、学生の実践的な学びと地域活性化の双方に貢献することを目的とした。少子高齢化という課題に直面する下田は、観光を基幹産業として、交流人口や関係人口の増加に向けた取り組みを進めている。

今回のプロジェクトでは、学生が地域住民と交流しながら映像制作を進めることで、地域の魅力を再発見し、地域住民自身が資源の活用方法を考えるきっかけを提供できることを目指した。

実践を通して得られた教育的観点の課題としては、まず、時間的制約と負担の問題があげられる。2泊3日の短期間で企画から撮影、編集までを行うタイトなスケジュールが、一部の学生にとって大きな負担となった。特に、夜遅くまでの編集作業は体力的・精神的な疲労を招き、作品のクオリティにも影響を与えたと考えられる。

次に、地域との関わり方の深度の問題である。多くの学生が地域住民との交流を通じて下田への愛着を深めた一方で、十分な交流ができなかったと感じる学生もいた。その結果、一部の学生は下田への関心が観光客レベルにとどまり、関係人口としての意識を持つには至らなかった。

そして、学生の作品の独自性と満足度の問題である。学生の多くは作品の完成に達成感を得たものの、独自性や創造性に欠けることに不満を感じていた。特に、コンセプトの明確化や表現技法の不足により、理想と現実のギャップが生じた。

これら課題を踏まえた今後の展望としては、まず、プログラム期間の見直しと柔軟性の確保を検討したい。学生がより深く地域に関わり、質の高い作品を制作できるようにするためには、段階的なスケジュールの導入が必要である。特に、事前のリサーチやオンライン交流を活用することで、現地での作業効率を高める工夫も求められる。

次に、地域住民との継続的な交流の促進である。今回は、授業の制約上、単発のフィールドワークにとどまるものとなった。作品づくりに携わった学生が継続的に訪問できるような工夫、あるいは

オンラインでのフォローアップを通じて、学生と地域住民の関係を深める必要がある。これにより、下田市の関係人口としての意識づくりをより促進することができる。たとえば、一度受講した学生がSAやTAのような形で、再度、プロジェクトへの参加を促すことも一案である。

そして、専門的なサポート体制の強化である。今回は、地元メディア（SHK）や地域のキーパーソンの方々に多くの協力を得ることができた。また、作品制作における技術的な指導やフィードバックの機会を得ることが学生のスキル向上の意識を涵養するうえで効果的であることが分かった。今後も、こうした地域と産学の連携を強化していくことが求められる。

最後に、発信力の強化と評価システムの確立である。学生の作品を地域内外で広く発信するために、たとえばメディア露出やSNSの活用をさらに推進する必要がある。また、今回、視聴者からのフィードバックを取り入れる仕組みを整え、学生の活動や作品が地域の人々にどのような影響を与えているのかを可視化することを試みたが、想定していたような機能を発揮しなかった。この仕組みを有効にするためのアイデア、あるいは別の仕掛けも検討することも必要と考える。この点、今回は事前準備が足りずに実現しなかったものの、本学との連携協定を結ぶ下田高校との授業連携も

ひとつの方策としてあげられる。このように、今後は、学生たちによるまち遺産をコンテンツとする映像作品の活用法の考案も含め、学生たちの作品が地域の側にどのような影響を与えるのか、検証を続けることが課題である。

以上みてきたように、今回の教育プログラムは、総じて学生にとって実践的な学びの場であると同時に、地域の魅力を再発見する貴重な機会となったと考える。今後は、学生と地域の双方向的な関わりを一層深めるために、プログラムの改善と継続的な関係構築が重要となる。これらの取り組みを通じて、下田市の地域活性化と関係人口の増加に貢献できる可能性が広がっている。

6. 謝辞

今回のプログラムの実践に際し、下田市役所建設課都市住宅係や下田有線テレビ放送（SHK）の方々をはじめ下田市の関係各位に大変ご協力をいただきましたことをあらためてお礼を申し上げます。また、下田市へのアプローチにあたり本学学修支援センターの北條規教授にアドバイスを頂いたこと、下田市職員の本学の来校にあたり地域構想研究所の山本恭久副所長補佐にご対応を頂きましたことにお礼を申し上げます。

参考文献

- 1) 長谷川隼人、田島悠史「関係人口が生み出す伊豆下田の景観施策—大学・地域連携型授業の実践に向けて」『地域構想』(6) 2024年3月
- 2) 田中輝美『関係人口の社会学—人口減少時代の地域再生』大阪大学出版会、2021年